

オリンピックと市町村

明治大学公共政策大学院ガバナンス研究科教授 青山 侑

1. オリンピックで社会が変わる

オリンピックは国家ではなく都市が主催する。2020年オリンピックの場合は、東京都が主催する。したがって東京の市町村はオリンピック主催者の重要な一翼を担うことになる。

競技場の大半は、代々木一帯と臨海部に集中しているが、各国選手団は日本の気候に慣れるため、事前に日本の各地でキャンプをして練習をするから、日本の各地はテレビ報道や観戦だけでなくいろいろな機会を通じてオリンピックと関わることになる。

東京の市町村にとっては、近代五種競技の会場となる武蔵野の森総合スポーツ施設（仮称）や味の素スタジアムなどの競技場だけでなく、地域として、まちとしてどうオリンピックに関わっていくかが大きな課題となっている。

オリンピックで東京を訪れた選手、関係者、観客は、競技に参加しあるいは観戦するだけでなく日本の各地に旅行する。かつて福岡でアジア太平洋博覧会を開催したときは、九州各地にアジアの人が旅行し、それ以来、アジアの人たちにとって九州は馴染みやすい地域となった。愛知万博のときは、万博を見物した人たちの多くが新幹線で東京に移動して当時完成しオープンしたばかりの表参道ヒルズを訪れたりした。オリンピックは、日本の各地にとって、観光開発のチャンスでもある。

オリンピックにおいては、スポーツだけでなく文化が第二の柱として位置づけられていて、文化イベントはオリンピック開催の3年前から全国各地で開催される。2012年ロンドンオリンピックでも文化イベントがイギリス各地で3年前から開催され、オリンピックムードが盛り上がった。

東京は、ニューヨークやロンドンなど世界の成熟国家の大都市と比べて、治安、交通、道路、清潔などの点では優位を保っているが、文化や芸術を楽しむという点ではまだまだといえる。

成熟社会の特徴は、少子化、高齢化、人口減少、経済の低成長だけではない。人々が生活の質の向上を求めてやまない点も成熟社会の大きな特徴だ。スポーツが盛んになり、音楽や絵画、そのほかのアートやエンターテインメントを楽しむ、多様な価値観を互いに認め合うのが成熟社会だ。

1964年東京オリンピックのとき、東京は首都高速道路や環七、そして東海道新幹線をつくった。それがその後の高度経済成長に大いに寄与した。東京は世界の大都市のなかでも道路面積率が低く、それぞれの道路の幅は狭いが、それでもニューヨークやロンドンに比べると渋滞の程度がまだマシなのは、このときつくった立体道路という世界でも稀な都市構造のおかげである。

都市内道路の連続立体交差も新幹線も欧米の模倣ではなく日本独自の発想だ。この時点で日本は都市構造においてヨーロッパやアメリカのキャッチアップを終えて独特の都市をつくり始めた。

そこには新たな時代をリードする日本人の気概が表現されていた。結果として1964年の東京オリンピックは都市の進化に最も貢献したオリンピックのひとつとなった。

2020年オリンピックに向けて東京は、1964年オリンピック当時のような本格的な都市改造を実施することにはならない。もちろん、建設中の首都高速道路中央環状線や首都圏外郭環状道路（外環）、首都圏中央連絡道路（圏央道）す

なわちいわゆる三環状道路の完成は急がれるし、いくつかの点で鉄道ネットワークの改善が必要とされるが、新たに長大路線を建設することにはならない。

2. オリンピックを楽しもう

時代は工業化社会から成熟社会・高度情報化社会へと移行している。それにふさわしい変化が東京にも求められている。

2020年に向けてこれからの日本では、スポーツを楽しむ人は飛躍的に増えていくだろう。スポーツ分野において、競技人口も観客も飛躍的に増えるだろう。いままではマイナーとされていたスポーツ種目もメジャーになるかもしれない。

現在、主要な駅近くの民間ビルの中には、民間会社が経営するジムやプールが入っていて利用者が集まり、それなりに賑わっている風景を見ることができる。しかし50年ほど前の日本ではこのような現象は想像することすらできなかった。当時、体育館やプールは自治体が設置するものと誰もが思っていた。今では、民間経営として利益をあげているのである。世の中は、私たちの想像力を超えて進化していく。スポーツ人口についても同じである。

文化や芸術についても同様だ。私たちはいま、一流のミュージカルやオペラ、コンサートのために大金を使ってニューヨークなどに出向く。たとえばブロードウェイの劇場に行くと、そこでは現地に住むニューヨーカーが家族連れで普段着で一流の芸術を楽しんでいる。ジャズレストランなどでもそうだ。

日常的に観ているから目も耳も肥えている。下手な演奏や演技に対してはブーイングで演者や奏者あるいは歌手を倒してしまう。だからプロの腕が磨かれ、一流の芸術家が育ったという一面もある。

ニューヨークのハーレムにあるアポロシアターという劇場ではアマチュアナイトという催しがあって、アマチュアが次々と登壇するが、

次々と観客のブーイングによって退場を余儀なくされる。それらの中で優れた演奏や歌があると観客は打って変わって惜しめない拍手によって称賛する。ここからは何人もプロが巣立っていった。

日本の社会で一流の文化芸術を育てるためには、まず、私たちが率先して遠慮なく、文化芸術を楽しむことが大切だ。そうすればいいものが育つ。いいものができれば、世界の人が見るために集まる。オリンピックも、そういう機会として利用するべきだ。おもてなしは大切だが、私たちがオリンピックを楽しむべきだ。

ニューヨークやロンドンには、スポーツ、ファッション、美術、音楽、産業イベント、さまざまなエンターテインメントを楽しむ場がそこかしこにある。多くの市民がそれらを利用し、十分にビジネススペースに乗っている。オリンピックに向けた再開発において東京で新築されるのは、オフィスとマンションばかりというわけにはいかない。スポーツ施設や美術館、イベントホールなどが重視される時代になっていく。

オリンピックはスポーツの祭典であることはもちろん、近年は文化性、芸術性、ファッション性、デザイン性を競うイベントになっている。オリンピックを契機に、日本にも生活を楽しむ文化が根づいていくだろう。将来、東京にスポーツや芸術、イベントを目当てでやってくる観光客があふれるようになれば、十分に歴史的意義があるオリンピックだったといえよう。2020年オリンピックには、このような都市の変化、社会の変化が期待されていると思う。

3. 最先端技術活用の

省エネ都市像発信を

地震や水害、噴火など自然災害があるたび強くなってきた東京であるが、日本はエネルギー資源が乏しい国土であることから、世界に冠たる省エネルギー構造の都市をつくってきたことも確かである。地球環境問題が人類最大の問題